

はじめに

いま「グローバル」という語を使うならば、その両義性に注目しないわけにはいきません。「グローバル経済」「グローバルイニシアティブ」「グローバルイズム」などと呼ばれる現象が負の側面をもっていることは少なからぬ人が認めるところです。グローバル化した経済によって負の影響を被っている地域を指す「グローバル・サウス (Global South)」という表現が一般化しつつあることは、そのことに對する危機感の現れと言えるかもしれません。

他方で、私たちの直面している様々な問題が「グローバル」な視点を要求していることも紛れもない事実です。地球温暖化は言うまでもなく、いま全世界が苦しめられているコロナ禍も、特定の地域や国のことだけを考えていては到底たちうちできません。また二一世紀が始まって既に二〇年が経ったいま——つまり二一世紀の五分の一が過ぎ去ってしまったいま——、二〇世紀、更には近代につ

いての反省はよりいっそう深まっていますし、深まっていかなばなりません、その際にも、歴史を「グローバル」の水準で捉えることは必要不可欠です。

本書のタイトル「地球的思考」は、編者である私が、「グローバル」な水準での学問の試みに対して仮に与えた名前です。「グローバル」という語の両義性を視野に収めつつ思考する様々な試みを、さしあたって一箇所に仮止めするために作り出した言葉です。本書にはまさにそのような試みであると言わなければならないと思います。そして各分野の最先端が語られています。

本書は「地球的思考」のようなものが必要であろうと何となく感じてはいるが、確かな手がかりが得られていない、と、そんな風に考えている方々に向けられて作られています。各章のもとになったのは、「グローバル・スタディーズ」をテーマに行われた連続セミナーの記録です。目次を開いてみてください。実に様々な分野の研究者の方々が、「グローバル・スタディーズ」というタイトルのもとで考えられること、考えられるべきことを語ってください。

読者の皆さんには、ぜひとも気になる箇所から読み始めていただければと思います。いずれの論考も地球的思考への手がかりを与えてくれます。本書をお読みいただきながら、お一人お一人の地球的思考が像を結んでいくことになれば、編者としてとてもうれしく思います。